

キリスト道講演会（奈良第11回）

## 聖書を生きる、キリストを生きる（一）

2019年4月6日（奈良ホテル・リガール春日野）

奥田昌道

空気と太陽 聖霊と人の子 終末の迫りの中で 平成最後の講演会 キリストの伝道の特徴 羊と山羊とを別つ如く 天の次元からの語りかけと実証 イザヤ書53章「神の僕」詩篇103篇「人生は神讚美」 死の克服、永遠の生命の実証と約束 天の次元に生きる 神に対する絶対的な信頼 荒野における試み、湖上で眠り給うイエス ゲッセマネの祈り 我々の生き方の指針 祈り

### ● 空気と太陽

皆さん、どうもよくおいでくださいました。

皆さんは、空気というものを冥想されたことがありますか。

「われ空気のうちに、空気わがうちに」

と。この「空気」を「キリスト」に代えたら、パウロが言ったとおりです。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と。皆さんは空気に包まれて、空気を吸いながら、生きている。空気は私たちを包み、寝ても覚めても、空気は中へ入って我々を清めてくれて、そしてまた出ていく。その繰り返しです。寝ても覚めてもです。これが入ってこなくなったら、もう我々は終わりです。それでいながら、皆さんは空気に感謝していますか。まずいなしでしょうね、空気に「ありがとう」と言う人は。お天道さんには「ありがとう」と言うけれども、空気は見えないから見えないけれども、我々を活かしてやまないのが空気です。

空気と同じように御霊みたまのキリスト、霊なるキリスト、キリストさまは見えない。「キリストはどこにいますか」と探したって見えないんです。空気は見えなくても、寝ても覚めても私たちを包み、私たちの中へ入ってきて、そしてまた出ていく。それで私たちは活かされている。この共通した真理に驚いていただきたい。真理はあちらこちらにこぼれています。

「空くう」——空気の空——これは空からつぽということ。無、ゼロです。ゼロなるものが我々を活かしてやまない。これも不思議なことですよ。「気」というのは霊のことなんです。

「われ空気のうちに、空気わがうちに」

「われ御霊のキリストのうちに、御霊のキリストわがうちに」

これが私たちの生き方の姿なんです。演題の「聖書を生きる、キリストを生きる」というのは、日常生活がキリストさまと離れては在り得ないということ。ちょうど空気と離れて我々が在り得ないように。空気は私たちを包んで生かしていても、我々は空気にお返しも何もしていない。それでも、空気は文句を言わないで、我々を生かし続けてきている。



御霊のキリストさまもそういうお方です。我々の罪や咎<sup>とが</sup>などを全部、十字架できれいに片付けてくださった。清い空気を送ってください。霊を、御霊を送ってください。そして私たちは生きるものとなった。そういうふうに、空気というものを思うだけで、

「あつ、御霊のキリストさまも空気と同じようなお方なんだ」と気づきます。

太陽を見ます。たった一つの太陽が悠久の昔から、一つの地球を照らし続けてきてくれた。民族の差別も何もない。地球は一つ、太陽は一つ。しかも、太陽の引力でずっと地球は太陽のまわりを回っているそうですね、自分も自転しながら。

そういう太陽と地球の関係、これはキリストさまと我々との関係のようなんです。太陽が地球を生かしている。キリストさまが私たちを生かして下さっている。私たちは生かしていただくだけの値打ちがない。汚れているから、それを全部キリストが吸い取ってくださった。交換輸血みたいなものです。我々の中の汚いものは全部キリストが背負ってくださった。十字架で私たちを解放して、十字架で心の中をゼロにしてください。ゼロのまま放っておいたら、変な霊が入ってきたら困りますから、「聖霊」という清い霊が入ってくる。これが「真理」なんです。だから、「真理」というのは非常に単純なんです。そして深い。そのことに驚かないといけない。

私を導いてくださった小池辰雄という先生は、

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」

と言った。皆さんは本当に聖書を読んで、驚いておられますか。「すごいよ、すごいわ!」と。イエスという方は祈っておられると眩<sup>まぼゆ</sup>くなり、そこへすでに召された古代イスラエルの指導者モーセと預言者エリヤが現れて語り合ったというんですよ。イエスは神の栄光が宿ったお方なんです。だから、聖書には五つのパンと二匹の魚で五千人の人を養われたとか、イエスが湖の上を渉<sup>わた</sup>ってこられたとか、不思議なことが書かれています。これはもう当たり前のことなんです。

### ●聖霊と人の子

イエスというお方はマリヤさんのお腹の中に宿ったので、これは私たちと同じ人間の面です。他方、

「聖霊によってみごもった」

とあり、これは神さまから直接由来している。神さまから直接由来しただけだったら、我々人間とギャップがあつてどうにもしようがない。ところが、マリヤさんのお腹の中に宿ったことが流れてますから、私たちと共通項がある。ありがたいなあと思います。神さまは遠い所にいるのではなくて、本当に降<sup>くだ</sup>ってきてくださる神さまです。

「いと高きところにあります神は、いと低きところに降りたもう」（イザヤ57・15）



とイザヤ書に出てきます。そして我々を生かしてください。私は旧約聖書の中では、イザヤ書、それも40章から以下の第二イザヤと、55章以下の第三イザヤが素晴らしいと思う。キリストも53章のあの「僕の歌」――あの苦難の僕です――それをご自分のものとして受けとって、それを自ら実現してください。そのため我々は贖いにあずかって生命をいただいたという、素晴らしい世界にいます。こういうことを驚きの目をもって感謝して受けとる。そして、それが我々のうちに宿ったら、人に伝えないではいられなくなる。皆さん、どこかおいしいレストランに行つて、素晴らしいお料理を割合にいい値段で食べられたら、そのことを近所の人に言うでしょ。

「このレストランはいい。こんな安い値段でうまいものを食べさせてくれるよ」と言わないではいられない。皆さんもキリストをそのように、

「このお方は宝よ、宝を隠しておくわけにはいかん。この宝をみんなに分ち与えないではいられない」と、そのくらいになつて欲しいんです。パウロは

「われは狂えるごとく。狂えるならあなたのためだ。われ土の器に宝を持てり」

と言いました。パウロの自己告白ですよ。しかも、そのパウロはどんな人か。以前はキリストに逆らつていたわけですよ。ところが、ダマスコへの途中で天から光が来てぶつ倒されて三日間、目も見えず、喉も物が通らない。イエスの弟子の一人アナニヤの按手を通して、

「目から鱗のいときもの落ちたり」

と。それで生まれ変わつて、それ以後キリストを伝えだした。だから、ユダヤ教徒からは裏切り者ということで迫害を受ける。劇的な生涯を送つたパウロです。

そういう人たちのことを昔の偉い人の話とは思わないで、もう少し自分事として考えてください。私なんかは「パウロさん」「ヨハネさん」と呼んでいる。お友だちではないですか、皆さん。時代は違うけれども。あの人たちは特別に偉いから選ばれたのではない。キリストの直弟子というのは元はみなお魚採りですよ。

私はキリストが偉いと思うのは、弟子として無色の人を選んだことです。宗教家を選んだのではない。宗教という既成の観念のないような漁師をつかまえて、三年間修行させて、これからは人を漁る者にしてあげる。でも、すぐにはなれませんと。聖霊降臨で彼らは生まれ変わった。聖霊降臨以降の使徒行伝に出ますように、彼らに霊なるキリストが乗り移つて、キリストと共に二人三脚でやるようになってから、もの凄い素晴らしいことが次々と起こりました。なにもああいうことを現象的に起こそうというのではない。それと同質のものが我々のなかに宿るといふことです。宿つてくださるんです。

空気の話をしたのは、空気は、気づかないうちに私たちの中に入って来てくれて、私たちを清めてまた出て行く。「呼吸」といいます。「呼」というのは吐くほうで、「吸」は吸い



込むほうです。まず吐き出さないと、いいものは入ってこない。水泳だつてそうです。息を吐いてパツと口をあけると、空気が勝手に入ってくる。けれども、吐かなければ入ってこない。この自然界は真理に満ちあふれている。

だから、お天道さんがあるだけで、もの凄いものをいただきますし、空気を冥想するだけでも素晴らしい世界に導かれます。自然界は神さまの栄光を表しているわけです。

「穹蒼は聖手のわざを示す」

と詩篇に出てきます。

私はいつの頃からそう思うようになったのか知りません。けれども、なにか聖書が慕わしい。聖書を開いていると、

「あつ自分の故里はここだつた」という、そういう思いになる。

### ●終末の迫りの中で

私は現在86歳ですから、もう先は見えている。100歳まで生きるとしたら、あと14年ありますけれども、100歳まで生きるか誰もわからない。明日にも終わりがくるかもしれない。しかし、100歳まで生かされるかもしれない。

人間はいつまで生きるか誰も保証していません。つまり、福音が語られたのは、終末の迫りの中で語られた。「終末」というのはこの世の終わりです。この世の終りになるとまず、神の審判があり、次に新天新地がすぐ来る。そういう迫りの中で福音は語られた。「今日も明日もまた次の日もある」と、のんびんだらりと永久にこの地球が続いていくという観念ではない。

「時は満ちた。神の国は近づいた。だから、悔い改めて福音を信ぜよ」

と仰った。そういう切羽詰まった気持ちの中で語られている。やはり、切羽詰まった気持ちの中で語られないと緊張感がない。しかもその迫りというのは、審判がまずあるわけです。審判があつて、それから新天新地がやってくる。だから、バプテスマのヨハネは厳しいことを言ってますね、

「お前たちはこのままで天国に行けると思ったたら大間違いだ。アブラハムが先祖におるから大丈夫だと思つたら大間違いだ」

と散々、叱咤しました。ところが、そのヨハネはキリストを紹介しながら躓きました。イエスという方はそのうちに厳しい審判をやってくれると思つて期待していたら、全然違う。獄中から自分の弟子をつかわして、

「私は間違っていたのでしょうか。来るべき方を他に待たなければいけないのでしょうか」

なんて聞きました。その時にイエスは答えて、



「ヨハネに伝えなさい。貧しい人は福音を聞かされている。癩病人は潔められ、死人は甦らされている。私に躓かない者はさいわいだ」

と。それから何と言っておられるかというところ、

「今まで地上に現れた預言者の中でヨハネが最大の預言者だ。けれども、神の国ではヨハネは最も小さい」

と。つまり、

「新しく生まれた者、キリストによって新しく生まれたクリスチャンたちは、あの最大の預言者ヨハネよりも素晴らしいんだよ」

ということを言われた。キリストはバプテスマのヨハネを非常に尊敬しながら、事態はヨハネの旧約時代から新しい時代が変わっていると。

「古いものは古い革袋に、新しいものは新しい革袋に入れなさい」

と言われました。

四つの福音書だけでも、もう驚くべきことがいっぱい書かれています。そこへ使徒行伝があつて、更にローマ書からずっとパウロ書簡が載っています。本当に新約聖書はよく出て来ていると思う。私は日々感心している。しかも、この聖書は、ありがたいことに詩篇付きでしよ。

詩篇というのは素晴らしい。皆さん、祈れない時は詩篇を読んでください。ひとりでに祈り心になります。詩篇の嘆きとか叫びを全部、キリストは吸い上げて、それを福音の中で実現しておられる。私にはそう映る。ですから、『新約聖書（詩篇付き）』というのはよく出て来ている。私の持っているものは文語訳です。口語訳の「くであらう」というよりも、文語訳の「くべし」という表記で、ビシッとやられる方がうれしいから。そういう文語訳聖書を使っている。

日本人にとっては、なにかキリスト教というのは遠い外国のものであるとか、なにかインテリの飾りものという、そういう観念がはびこっているように思います。けれども、そうではないと思います。一人ひとりが生きていく上で、なくてはならない本当の生命のパンを与えてくれるものだと思います。そのことを皆さん一人ひとりが伝道者となって伝えていくことが大事だと思います。どうも明治以来の伝道の流れを見てますと、インテリの知識的なものになってしまっている、日本のプロテスタントの信仰というのは。なかなか一般の人々にしみ込んでいかない。一般の人々にしみ込んでいくような伝道をなさったのは賀川豊彦です。あの賀川先生というのは本当に一般の人々の中へ入りこんでいかれたけれども、他の牧会者、伝道者は一段高い所から語っているという感が否めなかった。

### ●平成最後の講演会

今は平成の終わりで、平成最後の講演会をお聴きになる方々は、自分が一粒の麦となつ



て地に落ちて死に、そして多くの果を結ぶという、そういう生き方をしなくてはならないと思います。

「己を救わんと思う者、己を固執する者はこれを失い、わがため福音のために自分の命を棄ててかかる者は永遠の生命を得る」

と、ちゃんとヨハネ伝12章に書いてあります。キリストの言っていることはみんな本当のことです。だからもう

「アーメン、アーメン。そのとおり、そのとおりです」

ということ。「説教する」とかそんなつもりはあまりない。自己告白をすれば、聖書が言っていることと一致する、そういう気持ちが強いですね、私の場合は。

今日お出でになった皆さんは非常にさいわいだと思います。この講演会が来年もあるかどうかわかりません（笑）。いや、本当に誰もわからないですよ。私だって来年まで生きていくかどうかさえわからない。キリストさまだけがご存知である。

先程も申し上げましたように、私はもう86年地上で生きてきましたから、100歳まで生きるならあと14年ですね。86年対14年といえども明らかでしょ。向こうの近いことが歴然としている。それと、私の奥さんが7年前に向こうへ逝ってしまった。これは痛手でしたよね、本当に。

皆さんも福音の告白をなさるときは、うれしそうに楽しそうに話してください。

「私はうれしくてたまらん。言葉に言い尽くせないくらいにうれしい」

と。いろんな人に皆さんの人生を語りながら福音を証する。これが本当の証だと思う。むしろすかしい顔して「イエス・キリストは……」なんてやったら、聞く人はもう逃げていくわ（笑）でも、

「福音を証するあの人を見ていたら、なぜ、あの人はあんなうれしそうなのかな。貧乏なのになあ、あまり美人でもないのになあ」

という気持ちになってもらうことが大事です。皆さんがキリストを証すると、キリストさまが皆さんの中に入りこみ、そう変わるわけです。

「いやあ、私みたいな所にキリストが入ってくれるの？」

「私みたいなものなんて言いなされるな。十字架であんたはもうすっかり贖われてるんや。十字架で心の中がゼロにされている。あんたの中のゴタゴタや不信仰も全部、十字架で片付けたんや」

と。心の中がゼロになった所に変な霊がきたら困るから、聖霊という聖い霊が入ってきてくださる。これはみな恵みです。あなたが立派だからとか、信仰深いからとか、そういうこととは何も関係ありません。我々は空気を無条件に吸っている。先程言ったでしょ、

「われ空気のうちに、空気わがうちに」

「われ聖霊のキリストの中に、聖霊のキリストわがうちに」



と。空気の話をしたのは、

「キリストはそういうお方だよ、空気のようなお方ですよ」

ということ。向こうから勝手に入り込んでくださる。関西弁でいうと、

「好きやねん。あんたのこと好きやねん。だからあんたの所におりたいんや」

と。ヨハネ伝14章に次のように書いています。

「汝ら心を騒がすな。神を信じ我を信ぜよ。わが父の家には住処多し。われ汝らのために処を備えに行く。準備ができたらまた来りて、あなた方を私のもとに迎える。私のいる所にあなた方もいてほしいんだ」

と。聖書のどこを選んで読むかというと、ヨハネ伝14章から16章は絶対にはずさないでください。ヨハネの14章から16章は弟子たちに対しての遺言です。13章で、

「**過越の祭の前にイエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り。**もう自分の終わりは来たと悟って、

**世にある己の者を愛して極みまでこれを愛し給えり**」

と。この言葉だつて感動的ですよ。もうこの世を去らねばならない。しかも十字架にかかることが待っている。そういうことを前にして、

「**己のものを愛して極みまでこれを愛し給えり**」

と。それから3節に、

「**イエス父が万物を己が手に委ね給いしことと、己の神より出でて神に至ること**

**とを知り**」

と。神の居た所から来た方は神の居た所に帰る。かぐや姫はお月さんから来たからお月さんに帰りました。ところが、キリストは神の居た所から出て神の居た所に帰る前に、十字架にかかることがあった。十字架にかかるということに先立って、ゲッセマネの祈りがあります。弟子たちに、「祈っていてくれ」と言われたけれども、弟子たちはみな寝てしまった。

「**額から落ちる汗は血の雫のごとし**」

と書いてある。

「**天使が現れて、イエスを慰めた**」

という。ルカ伝のあのゲッセマネの所に出できます。ああいう所は、皆さん、感動なしには読めないですよ。

「**イエス父が万物を己が手に委ね給いしことと、己の神より出でて神に至ること**

**とを知り**」

と。そして、弟子の足を洗われたわけですから、それから、14章からの遺言が出てきます。

この聖書は昔のことを書いた本ではない。今、我々を生かしてくる生命の書です。そのことを皆さんが本当に生活の中で現していただきたい。

「これは本当に私たちに生かしてくれる、天から降ってきた宝ものだ」



と。昔のまだ録音も録画もない時代によくこういうものを遺<sup>のこ</sup>してくれた。これだけでも奇蹟だと思えますよ。しかも、中味は素晴らしいではないですか。中味は福音書によつてはとどころ食い違いがありますよ。食い違いがあるのは当たり前ではないですか。それが聖書という形で遺<sup>のこ</sup>つている。それだけでも、我々クリスチャンにとつては大変な幸運です。聖書は私たちにとつては日々の食物以上の食べ物です。これなくして私たちに生命はないんですから。

我々の肉体の命は、この頃は栄養も豊かであるし、薬もよく効きますから100歳まで生きるかもしらん。霊なる生命、霊の生命——身体が土に還り、身体が無くなつたときに現れてくる霊体——これはキリストの復活された姿です。これが天に昇つていく。天に属するものは天に行く。地に属するものは地に帰る。これは当たり前の話でしょ。皆さんはそういう二重性をお持ちなんです。二重人格とはちがいます。土なるものに蒔<sup>ま</sup>かれながら、霊なるものが育つていく。土なるものは亡びて土に還る時、本当のものが顕れてくる。キリストは故<sup>ゆえ</sup>あつて地獄まで落ちて、地獄で苦しんでいる者を救われて、現れて来られたさまを「復活」と人間は称<sup>い</sup>っているだけです。本当の姿が現れただけです、あの復活という現象は。本来の姿が現れた。そして天に昇つて行かれた。そして、

「祈つて待つていなさい。聖霊となつて降<sup>くだ</sup>つてくるから」

と。ペンテコステ（聖霊降臨）がありました。

私には、昔の二千年前のことがもう昨日のごとくに思えます。遠い国のイスラエルの昔の話とはとても思えない。

「ありがたい。よくぞこれを遺<sup>のこ</sup>しておいてくれた」という気持ちで私はいっぱいなんです。

### ●キリストの伝道の特徴

では、今日の本題に入りましょう。レジメを作りました。書いてある中味は全部、キリストさまのことです。

新約聖書（福音書）におけるイエス・キリストの伝道の特徴とは何だろうか。演題は「聖書を生きる、キリストを生きる」ですが、クリスチャンの方ならどなたさまも、「聖書を生きる、キリストを生きる」というテーマを自分だつたらどうなふうに話さだろうか、どんなふうに人々に伝えるだろうか、そういう気持ちで読んで欲しい。「これは先生が作ったのか。よくできているな」というのではなくて、自分だつたらどんなふうに話し、どんなふうに伝えるだろうか。

日本では、クリスチャンは異常なほど少数です。日本人はヨーロッパからみたら異邦人で、日本の国内でも信者が少なく異邦人です。二重の意味で異邦人ですよ、仏教中心の国ですから。そういう中であつて「聖書を生きる、キリストを生きる」というテーマを掲げたのは、



皆さん一人ひとりがイエス・キリストを証する人、告白者となってほしいと、そういう思いでここに書いています。

《Ⅰ新約聖書（福音書）におけるイエス・キリストの伝道の特徴は、

(1) 終末の迫りの中で語られていること。

昨日も明日ものんびんだらりと未来永劫に続いていくという観念は、キリストにはない。終わりは近い。しかも「終わり」とはまず審判があるわけです。神の審判があるという、終わりは近いという迫りの中にある。終わりが来たら審判があつて、それから新天地が到来する。次にキリストの再臨がある。当時はそういうふうを受けとられていた。その中で語られています。それが聖言でいいですよ、

「時は満ちて、神の国は近づけり、汝ら悔い改めて福音を信ぜよ」（マルコ伝Ⅰ

章15節）であつた。》

この「悔い改める」という言葉の意味は、「心を翻す」ということ。燕がくるつと翻りますね、あのように方向転換して、福音を信ぜよと。「福音」というのは「よきおとずれ」「グッドニュース」なんです。むずかしくない。だから、

「時は満ちた。神の国は近づいた」

と。キリストは「私自身が神の国だよ」と。キリスト自身が神の国なんです。だから、「あなた方は心を翻して、福音の本体は私自身だから、私を受けとりなさい」と。

キリストの中にすべてがこもっていますから、そう仰つた。そしてまた、

《神の国の到来、キリストの再臨のことが、マタイ伝24章〜25章で語られている。》

「<sup>3</sup>オリブ山に坐し給いしとき、弟子たち窃に御許に來りて言う『われらに告げ給え…

その前にキリストは何と言われたか。弟子たちが神殿を見て

「ああ、立派な建物ですね」

と感心している時に、

「こんなものは木つ端微塵に無くなつてしまふよ」

と言われた。弟子たちは

「先生が仰つたことはどういうことなのですか」

と訊いた。

<sup>4</sup> イエス答えて言い給う『なんじら人に惑されぬように心せよ。<sup>5</sup> 多くの者

偽預言者です、偽キリストです。

わが名を冒し來り「我はキリストなり」と言いて多くの人を惑さん。

まあ、オーム真理教の麻原彰晃なんていうのはそういう中の一人かもしれませぬ。

<sup>6</sup> 又なんじら戦争と戦争の噂とを聞かん、

戦争が絶えたことがありませんね、地球上のあちらこちらで。



慎みて懼るな。かかる事はあるべきなり、されど未だ終にはあらず。7即ち「民は民に、国は国に逆いて起たん」また処々に飢饉と地震とあらん、飢饉と地震はたえず地球を襲つています。

8此等はみな産の苦難の始なり。9そのとき人々なんじらを患難に付し、また殺さん、汝等わが名の為に、もろもろの国人に憎まれん。

クリスチャンは全然いいことがないですよ。クリスチャンになつていいことばかりあると思つたら大間違いです。クリスチャンはキリストと運命を共にする。キリストの苦しみはわが苦しみなり、キリストの生命はわが生命なりと。キリストと運命共同体です。そうならなければクリスチャンではない。大体、日本人の信仰というのは御利益信仰なんです。いいものをもらえるから信じる。いいものをくれなかつたらもう信じない。つまり、自分に仕える神さましか相手にしない。

「神が主であつて、自分が僕」

という観念がない。それが日本人の一般的な信仰です。でも、聖書の教えてくれる道は違います。神が第一です。

「神太初に天地を創造り給えり」

と。「神」というのが先に出ています。

飢饉と地震とあらん、8此等はみな産の苦難の始なり。9そのとき人々なんじらを患難に付し、また殺さん、汝等わが名の為に、もろもろの国人に憎まれん。と。ヨハネ伝の中にも書かれています。

「人があなた方を憎んだつてあわてることはない。まず私が憎まれたんだから。私が憎まれてる以上、その弟子であるあなた方が憎まれてもしょうがないよ」

と言われました。

10その時おおくの人つまずき、且たがい付し、互に憎まん。内部で争いが起こる。

11多くの偽預言者おこりて、多くの人を惑さん。12また不法の増すによりて、多くの人の愛ひややかにならん。

不法がはびこる。それから愛が冷える。

13されど終まで耐えしのぶ者は救わるべし。14御国のこの福音は、もろもろの国人に証をなさんため全世界に宣伝えられん、而してのち終は至るべし。

と、ちゃんと書かれています。それからいろんな災いがふりかかってくることを仰っています。偽キリスト、偽預言者が起こってくる。

24偽キリスト・偽預言者おこりて、大なる徴と不思議とを現し、為し得べくば選民をも惑さんとするなり。25視よ、あらかじめ之を汝らに告げおくなり。



偽宗教家やサタンだつていろんなわざをやる。あの出エジプト記を見たつて、モーセはいろんなことをやっているでしょうし、すると相手もとにかく同じことをやっている。不思議なことですが、こどもちゃんと書いてますから。

29 これらの日の患難ののち直ちに日は暗く、月は光を発たず、星は空より墮ち、  
天の万象ふるい動かん。

ペテロ書にもこれと同じことが引用されています。

30 そのとき人の子の兆、天に現れん。そのとき地上の諸族みな嘆き、かつ人の子の能力と大なる栄光とをもて、天の雲に乗り来るを見ん。31 また彼は使たちを大なるラッパの声とともに遣さん。使たちは天の此の極より彼の極まで、四方より選民を集めん。……

と、預言しておられる。自然界だつていちじくが芽吹いてくると夏が近いと思うだろう。そのように神さまの時代の変化、移り変わりをちゃんと見分けなさいと。

33 かくのごとく汝らも此等のすべての事を見れば、人の子すでに近づきて門辺に到るを知れ。

いろんな天変地異的なことが起こってくるならば、もうキリストの到来は近い、再臨は近いことを知りなさいと。それらの天変地異的なものが起こるまでは、終わりは来ないということを言っておられる。こういう聖書の記事を読んでいると、決して喜ばしい気持ちにはなりませんよ。あの東北の大震災、大津波、ああいった天変地異的な現象は決して喜ばしいことではないけれども、必ず起こると。つまり、ひとりでに天国が来るとは全然言っておられない。必ずそういう破局があつて、それをぐりぬけて、初めて新天新地は現れる。そしてあなたたちはみんなから憎まれると、そこまで言われている。そのことをやはり心にとめておくべきですね。

34 誠に汝らに告ぐ、これらの事ごとく成るまで、今の代は過ぎ往くまじ。

35 天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎ往くことなし。36 その日その時を知る者なし、天の使たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給う。

使徒行伝の始めの方にも、「いつ終わりが来ますか」と聞かれた時、「自分も知らん」と言っておられます。この終わりの日のことがちゃんとここに言われている。そして、

44 この故に汝らも備えおれ、人の子は思わぬ時に来ればなり」（マタイ24・3）  
44（）

と言っておられる。それがマタイ伝の24章の所です。

### ●羊と山羊とを別つ如く

25章には「十人の乙女」の話や、「いろいろなタラント」の話が出てきますが、大事な話は31節からです。クリスチャンにはこの地上ではいろいろな苦難があります。けれども、



その苦難もすべて終わりの時にちゃんと報われる。そのことがここに書いてあります。

「<sup>31</sup>人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位に坐せん。<sup>32</sup>斯てその前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、<sup>33</sup>羊をその右に、山羊をその左におかん。」

羊と山羊は似て非なるものである。似ていながら、羊はよいが山羊はいかん。羊と山羊に分ける。どういふことかというのと、

<sup>34</sup>爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。<sup>35</sup>なんじら我が飢えしときに食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、<sup>36</sup>裸なりしときに衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来りたればなり」

とそういうことを仰る。「そんなことをした覚えは全くありません」と、その祝福されている人は言うわけです。

<sup>37</sup>爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲ませし。<sup>38</sup>何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。<sup>39</sup>何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」<sup>40</sup>王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」

と。これですよ。

「いと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」

と。マザー・テレサの行いがそうでしょ。マザー・テレサという人は、路傍で倒れて死んでいく人にいちいち、

「あなたはこういうふう<sup>ほつむ</sup>に葬<sup>ほうむ</sup>ってほしいの。ヒンズー教？ わかりました、ヒンズー教で葬りますよ。あなたはなに？」

と言って、いちいち倒れている人を訪ねては、その人が一番願っていることを叶えてあげるために尽くされた。「キリストを信じなさい」なんて言っていない。その人が一番最期に望むことをしてさしあげる。これがここで言われている姿だと思えます。

「いと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」

と。しかし逆に、いと小さき者に知らん顔し、金持ちにはかりペコペコ頭をさげている。そんな人は知らん、ということが次に言われている。ちようど、ここの話と山上の垂訓とが合致しています。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

「汝らは神と富とに兼ね仕えることあたわず」

と。山上の垂訓で言われていることと、この終わりの時の話はちゃんと一致しています。そういうふうなことを思います。



## ● 天の次元からの語りかけと実証

イエス・キリストの伝道の第二番目の特色は、

《(2) 天の次元からの語りかけと実証（徴）であること。》

つまり、天の次元からの実証、実現です。我々人間は地の次元で生きています。地の人は、地のことはいろいろわかる。けれども、天の次元のことは、これはノーベル賞をもらった人でもわからないです、本当のところを言っています。

いや、つくづくと思います。火星へ行くとか、宇宙に基地をつくってそこで生活するとか、そんなことを、キリストさまでも予測できなかったと思うようなことをやってのける。けれども、魂の問題、霊の問題については、人間は全然進歩していない。自然科学に基づく科学技術はイエスの時代から比べたらめっちゃくちゃ進歩しました。宇宙のことから、人間の身体のことから、生殖技術のことから、何から何まですべてです。クローン人間をつくりだす、そんな技術まで研究し、遺伝子を調べて予言する。そんなことまで人間はやりだしましたけれども、こと霊の世界、生命の世界については、キリストの時代に全然追いついていないどころか、むしろ後退している。そのギャップたるやすごいものです。皆さん、そう思われませんか。自然科学はめっちゃくちゃ進んだ。もうこれ以上はないということろまで進んでしまっている。けれども、こと霊の世界については、キリストの時代のほうがむしろ最高、ピークと考えられるんです。キリストの時代に帰ろう。私はそういうふうに思います。

天の次元からの語りかけと実証、それをキリストは成就された。それがどういう形で顯れているかというところ、

《罪の赦しと病の癒し（詩篇103篇2節〜5節参照）》

これは詩篇の103篇に書かれています。詩篇は150篇ありますけれども、その中で私は、最高の詩篇は103篇だと思っています。美しいのは23篇です。

「主キリストはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。主キリストは我を  
みどりの野にふさせ、いこいの水濱にともないたもう」

と、あの23篇は本当に美しい。けれども、私は詩篇の中でスケールの大きさ、深さでは103篇が一番だと思っている。103篇をちよつと読んでみます。「エホバ」と書いてある所は「キリスト」と読み替えます。

「わが靈魂よ、キリストをほめまつれ、わが衷なるすべてのものよ、そのき  
よき名をほめまつれ。わがたましひよ、キリストを讃まつれ、そのすべての  
恩恵をわするるなかれ。」

我々の存在理由は何ですか。神讚美なんです。神・キリストの讚美。そのために人間は生み出された。私はそう思いました。

「何でも自分のため、自分のため。自分を幸福にしてくれる神さまなら信じていい



「いと」と、つまり御利益ですよ。けれども、キリストの神さまは違う。イエスは、  
「父よ、あなたの御意がなりますように」  
と祈る。イエスというお方にとつては「父」が最高です。

「あなたの御意が天における如く地にも成つてください。あなたの聖名が崇められますように」

と。「主の祈り」ということで我々は教わってきました。神さまがすべてです。

「まず神の国と神の義を求めよ」

と仰った。まず神さまなんです。そうすれば、

「必要なものはすべて与えられる」

と。これが福音です。この103篇がまさにそういうことを預言していると思います。「すべてのもの」とは、身体全体のことを指しているのです。伝統的な中国の医学用語では「五臓六腑」と言います。

「<sup>1</sup>わが靈魂よ、主キリストをほめまつれ、わが衷なる五臓六腑よ、そのきよき名をほめまつれ。<sup>2</sup>わがたましひよ、主キリストを讃まつれ、そのすべての恩恵をわするるなかれ」

と。「すべての恩恵」とは何でしょう。「あなたのすべての不義を赦し」という。

「義人なし一人だになし」

といわれるほど、誰も神の前に立てない。ところが、それらを全部赦してくださいました。

<sup>3</sup>主キリストはなんじがすべての不義をゆるし、汝のすべての疾をいやし。

病気は苦しい。癒されたいですよ。

### ●イザヤ書53章「神の僕」

そのことがちゃんとイザヤ書53章で、

「そのうたれし疾によりてわれらは癒されたり」

と書かれています。

「<sup>3</sup>かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患をしれり。また面をおいて避ることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼をとうとまざりき。」

あんな人はいやだ、あんな汚いのはいやだと、そういうふうには侮られた。

<sup>4</sup>まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら

思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。

傍観者として、「ああイエスは悩んでいる、苦しんでいる、神にうたれている」と見ていたところ、



5 彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、十字架で碎かれた。

みずから懲罰をうけてわれらに平安をあとう。そのうたれし痕によりてわれらは癒されたり。6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。

自分勝手な行動を行ったと。

然るに神はわれら凡てのものに不義をかれ（イエス）のうえに置きたまえり。これは十字架のことです。ね。

7 彼はくるしめらるれどもみずから謙だりて口をひらかず、屠場にひかる羔羊の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。8 かれは虐待と審判とによりて取り去られたり。その代の人のうち誰か彼が活躍するもの地より絶れしことを思いたりしや。彼は民のことがの為にうたれしなり。9 その墓はあしき者とともて設けられたれど死ぬときは富るものともになれり。かれは暴をおこなわず、その口にも虚偽なかりき。

10 されど神はかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまえり。

神さまがイエスを苦しめて喜ぶはずがない。イエスを苦しめたままにした神さまは、神さまが悩み痛んでおられるはず。です。

東京神学大学教授の北森嘉蔵という人が「神の痛みの神学」ということを言われた。それに対して、小池辰雄は「神の碎けの神学」ということを言われた。「痛み」ではない。彼は碎かれ給うた。その碎かれ給うたことによつて我々は癒された。そういうことを小池辰雄は言いました。

「神はかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまえり」

という所からきていると思います。

「斯てかれの靈魂とがの献物をなすにいたらば彼（イエス）その末（子孫）をみるを得その日は永からん。かつ神の悦び給うことは彼の手によりて栄ゆべし。

11 かれは己がたましひの煩勞をみて心たらわん。わが義しき僕はその知識（奥義）によりておおくの人を義とし又かれらの不義をおわん。12 このゆえに我かれをして大なるものとともに物をわかち取らしめん。かれは強きものとともに掠物をわかちとるべし。彼（イエス）はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ愆あるものとともに数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい愆あるものの為にとりなしをなせり」

と。イザヤ書53章にこんな預言がされている。イエスはもちろんイザヤ書を愛読しておられたから、自分はこのイザヤ書の「神の僕」を——「神の僕」の預言はイザヤ書の中に七つある——それを全部、キリストはご自分の役割として受けとられたはず。です。



## ●詩篇103篇「人生は神讚美」

イエス・キリストの伝道の特徴は詩篇によく頌られていますので、詩篇103篇へ戻ります。

「なんじがすべての不義をゆるし 汝のすべての疾をいやし、

と、これがいま述べたイザヤ書53章です。

4 なんじの生命をほろびより贖いだし 仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ。

5 なんじの口を嘉物にてあかしめたもう。

神の口から出てくる一つ一つの言葉が御霊の生命をくださるという。

斯てなんじは壯きて驚のごとく新になるなり。

クリスチャンが「驚のごとく新になって」羽ばたいていなかったらおかしいですよ。私は86歳ですけども、まだまだ気持ちはこの詩篇のとおりです。腰は曲がつてきたけれども、うちなるものは本当に燃えていますよ。燃えざらんやという思いにさせられてしまう。先が近い。それはそうでしょう。仮に100歳まで生きるとしたら、既に86年生きましたので残りは14年になります。86年と14年を比べてみても、向こうが近いわけです。しかし、向こうは輝いている。本当のところはあと1年か14年か知りません。けれども、いつ休れても、

「アーメン、ハレルヤー！」

と、翼を張つて向こうへ昇つていく。そういう気持ちなんです。だから、皆さんも、ご高齢の方がいらつしやったら、

「あつ、そういう方がキリストさまなんだ。キリストさまは甦つて永遠に生きておられる方だ」

と。そのお方が、

「お前好きなんや。私はお前の中に入りたいんや。好きやねん、好きやねん」

と言って、一人ひとりを抱きしめて、空気がうちに

「われ空気のうちに、空気わがうちに」

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と、そういうふうにしてくださるのがキリストさまなんです。それなのに、

「私はそんなもん、いらん、いらん、いらん」

と言つたら、キリストさまは遠慮深いから、「いらん、いらん」という人の所へは無理に入つてこられない。無理に入ってくるのは強盗ですよ。でも、キリストはおずおずと戸を叩いておられる。ヨハネ黙示録にあるように、

「われ戸を叩く。開いてくれたら、一緒にご馳走を食べたいよ」

と、黙示録で言っておられる。聖霊という方は本当に慎み深い霊ですよ。そういうお方で、すから、本当に御霊のキリストさまを大事に大事にしてください。この103篇は、

「5なんじの口を嘉物にてあかしめたもう。斯てなんじは壯きて驚のごとく



新あらたになるなり」

という。皆さんも本当にそうなつてほしいです。それから8節に、

「8キリストはあわれみと恩恵めぐみにみちて怒りたもうことおそく仁慈いつくしみゆたかにましませり。9恒つねにせむむることをせず永遠とこしえにいかりを懐いだきたまわざるなり。10キリストはわれらの罪の量かさにしたがいて我等をあしらいたまわず、われらの不義のかさにしたがいて報むくいたまわざりき」

と。もしも、罪の量にしたがって私たちをあしらつたり、不義のかさにしたがいて報いられたら、私たちはもうふつ飛んでいきますよ、もうどこにもいないですよ。ところが、キリストは罪の量や不義のかさに応じた報いをせずに、それらを全部引き受けてくださっている。そして11節、

11神をおそるるものに神の賜たまうそのあわれみは大おおにして、天の地よりも高きがごとし。12そのわれらより愆しがをとおぎけたもうことは東の西より遠きかごとし。13神の口をおそるる者をあわれみたもうことは父がその子をあわれむが如し。

そして、人間というものはいかに儂はかないかということが次に出てきます。

14神我等のつくられし状さまをしり、われらの塵ちりなることを念おもい給えばなり。15人のよわいは草のごとく、その榮さかは野の花のごとし。16風すぐれば失うせてあとなくその生おいいでし処ところにとえど尚なしらざるなり。

砂漠の熱風が吹けば、どんな花も枯れてしまう。

17然しかはあれど神の憐憫あわれみはとこしえより永遠とこしえまで主キリストをおそるるものいたり、その公義ただしきは子孫のまた子孫にいたらん。

クリスチャンは子々孫々まで祝福されるという。

18その契約をまもりその訓諭を心にとめて行うものぞその人なる。19神はその寶座みくらをもろもろの天にかたく置たまえり、その政權まつりごとはよろずのものうえにあり。20神につかうる使者つかいよ、神の聖言みことばのこえをきき、その聖言をおこなう勇士ますらおよ

「はい、私ますらおがその勇士ますらおです」と、皆さん、そう思ってくださいね。我々は神さまに仕えるお使いでしよ、仕える者、僕しもべでしよ、婢女はしためでしよ。神さまの聖言の声を聴いて、その聖言を實現まかなしていく、人々に語り伝える、そういう役割を担あかしびた証人あかしびとでしよ。

主をほめまつれ。21その万軍みことばよ、その聖旨みことばをおこなう僕等しもべらよ、主をほめまつれ。22その造りたまえる万物ものごとよ、主の政權まつりごとの下なるすべての処ところにて主をほめよ、わがたましひよ主を讚ほめまつれ。」

最後は讚美です。人生は神讚美なり。私はそれを今日、皆さんに差し上げたい。人生は神讚美なりと。人生の「目的は」と言いたくない。目的はと限定したくない。人生そのもの



が神讚美なんです。私が生きているということは即ち、神を讚美することです。桜の花は太陽を讚美していると思う。いろんな花が咲いています。全部、太陽を讚美している。太陽の光によって色々な花が生み出されている。自然万物が天を指して讚美している、神を讚えている。人間だけがブツブツ言っている。それがこの世ではありませんか。イザヤ書は、「地ばかり見ないで、天を仰ぎ見ろ。そこに神がいらっしゃって、そこからあなた方を生かさそうと思つて、やつてらっしゃるんだよ」と。イザヤ書の40章以下は素晴らしいですから、どうぞ、そういうものを皆さんの力にしていただきたいと思えます。

### ●死の克服、永遠の生命の実証と約束

《死の克服、永遠の生命の実証と約束》

ナインの若者の蘇生（ルカ伝7章11節〜17節）、ヤイロの娘の蘇生（マルコ伝5章21節〜43節）、マルタ、マリヤの兄弟ラザロの蘇生（ヨハネ伝11章1節〜44節）

キリストは死というものを乗り越えられて、永遠の生命の実証と約束をなされた。決して言葉だけで言っておられない。現実にならざるを實踐、実証されました。それが「ナインの若者」の蘇生です。寡婦の独り息子が死んでしまった。お葬式の柩が担ぎだされてきた。イエスは柩に近よって、

「若者よ、起きよー！」

と言われた。彼は起き上がってきた。こんなすごいことは見たことがないと、ルカ伝に出てきます。あとでじっくり味わってくださいね。

次に、「ヤイロの娘」の蘇生。会堂の長であったヤイロの12歳のお嬢さんが死にかかっている。それでイエスに

「何とかお願いします。うちの娘が死にかかっているから助けてください」

「よっしゃ、行つてあげる」

とキリストは言われた。途中でハプニングがありました。長血を患っている女性が後からこつそりキリストの衣の裾に触った。そしたら、直ちに血のものが乾いた。

「ああ、誰か触ったね」

「みな押し合いへし合いしているのに、触ったもへちまもないですよ」

とペテロが言いました。

「いや違う。私から力が出ていった」

と。後を振りかえつたら、女性が畏れ戦っている。それは血で汚れている者は神の前に出られないからである。「その女性は医者のためにさんざん苦しめられた」と書いてある。もちろん、今のお医者ではありませんよ。あの当時、医者のためにさんざん苦しめられて、すつからかんになつてしまった。更に病気はますます悪くなるばかりだった。それでやむ



なく、血で汚れている女性は神の前に出てはいかんから、後からそつと衣の裾に触った。そしたら、キリストから力が流れていった。そういうハプニングがありました。

そうこうしているうちに、ヤイロの家に行くのが遅れた。ヤイロの家から使いが来て、

「お嬢さんはお亡くなりました。もう先生に来てもらっても無駄です」

と。イエスは何と仰ったか。

「わしに来てくれと言っておきながら、人が死んだからあきませんなんて、勝手な

ことを言うな」

と。イエス自身が「ああこれはもうあかんわ」と言ったら別ですよ。ところが、イエスは行こうとなぎっているのに、それを

「お嬢さんは亡くなりましたから来てもらっても無駄ですなんて、わしをなめちよ

るか」

と。それで、イエスがヤイロの家に行かれたら、本当にもうみんなワーワー泣いている。イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネと両親だけを連れて、女の子の所に行って手を取って、

「タリタ、クミ！（少女よ、起きよ！）」

と言ったら、少女は起き上がってきた。12歳にもなっているから、

「食物を与えなさい」

と。聖書にあるこういうお話を聞いたら、もう感動でふるえて当たり前ではないですか。皆さん、そう思いませんか？ 両親はもちろんうれしかったでしょう。

けれども、イエスがああいうことをなされたということは、そういうことのつけを全部、自分がひつかぶっておられるんです。たとえば、姦淫の現場で捕らえられた「罪の女」をイエスは赦された。

「私もあなたを罰しない。これからはもうやらないように」

と言われた。このように、イエスはいろんな人を癒したり、罪を赦された。そのつけは全部、自分の上にひつかぶっておられる。

出雲神話の中にいすも大国おおくにぬしのみこと主命の話がありますね。いつも大きな袋を背負って歩いていて。その神様と同じように、あの袋の中へキリストは全部、人の罪とか何とかを全部放りこんで、代わりに自分の生命を与えて、最後には十字架でその贖いを、決着をつけられた。これがキリストの愛ですよ。美しい言葉を述べていただけではない。罪を赦し、病を癒し、そのつけは全部、自分が背負われた。そのことが先程述べたイザヤ書53章です。

「その打たれし傷により我らは癒されたり」

とありましたね。そういうものですから。

それから、ラザロがよみがえ甦ったのもこうした例です。墓に葬られて四日もたっていた。臭くなっている。イエスはそのラザロを甦らせたでしょ。まさによみ陰府から呼び返された。「よみがえり」というのは「よみ」に行っていたものを「かえらせる」「よみがえり」ですね。



そういうことをなさった。

「我は復活よみがえりなり生命いのちなり。我を信ずる者は死すとも生きん。おおよそ生きて我を信ずる者は永遠とこしえに死なざるべし」

と、マルタとマリヤに仰った。マリヤとマルタは、

「終わりの時に甦よみがえることは聞いております」

「違う、違う。終わりの時なんていう呑気のんきな話ではない。今だ」

福音というのは今だと。

「我を信ずる者は永遠に死なざるべし」

それで、

「ラザロよ、出てこい！」

と。イエスはその前に祈っておられますね。そして「出てこい！」と言われたら、ラザロは出てきた。聖書にあるああいう話は凄いですよね。それがヨハネ11章1節から44節に出ています。

### ●天の次元に生きる

最初に述べましたように、天界から降くだってこられたイエスはマリヤさんの血と聖霊という聖きよい霊と、この二つから出来上がっている。イエスは、マリヤさんのお腹の中に宿ったので、我々と同じように人の痛みを知り、涙を流す。それと同時に、聖霊の力を有もっている。病も死も全部ぶつ飛ばす力を持っている。この二つを兼ね備えておられるから、イエスという方は本当に素晴らしい。私はそう受けとっています。イエスは自分だけがそういう次元にいるのではない。

「あなた方もみなその次元に生きるんだよ。その次元に生きないとだめだよ」

ということを言われた。それが以下に書いてあることです。終末の中で語られたということと、天の次元からの語りかけであったということ。この二つが重要なことです。それをもとに我々はそういう次元に生きる。そのことをイエスは求めておられる。一つ目はニコデモとの対話において出てきます。

《①ニコデモとの対話において、人は新たに（上より・天より）生れなければ、神の国に入ることが出来ないことを示された。生まれながらの人間（地に属する者）「肉なる人」は、そのままでは、神の国を見ることも、神の国に入ることにも出来ないことを論さとされた（ヨハネ伝3章）。また、人を生かすものは「霊」であって、「肉」は役に立たない、と（同6章63節）》

「人は新たに生まれずば神の国を見ることできない」

「人は上から生まれなければ神の国に入ることができない」

と。新たに生まれなければ、神の国を見ることも、中に入ることもできないと言われた。



観念の世界のことではない。頭でどう考えるかの問題ではない。現実感のあることなんだと。肉から生まれた者は肉である。霊から生まれた者は霊である。「肉」というのは、生まれながらの自然的な我々の姿が肉です。その内実は何かというところ、「エゴ」なんです。肉という言葉で表されているのは、生まれながらの自然的な姿の我々という面と、その内実としてのエゴ、自己中心の両方を指しています。

先程申しましたようにお宮参りは全部、自分のために行っています。自分の幸せを頼んで大晦日からずっとはしごをなさっていますね。次にはどんな御利益ごりやくがいただけるだろうかとかやっています。

人間とはそういうものなんです。肉から生まれた者は肉を守りたい。自然的な生命体としての自分を守ろうとする自己保存本能がある。それを突き抜ける世界、それが霊の次元です。そのことを以下に書きました。

《此の場合の「肉」は自己中心の生き方、「霊」は神中心の生き方を指す。

イエスという方はこの神中心の生き方をなさいました。

②「天の次元」に生きる生き方の一端は、マタイ伝5章43節〜48節、同6章19節〜34節に示されている。》

ここを皆さんと一緒に味わいたいと思います。イエスはご自分が生きておられる霊の高い次元を私たちにもくださろうとしている。自分は高い所において、「君たちは低い所においてしようがないね」では終わらないんです。

「天の次元の永遠の生命の世界をあなた方に無条件で差し上げたい」

と言って、我々に迫ってきてくださっている。

「いや、こんな汚れた人間でもいいんですか」

「汚れは全部、わしが引き受けたよ」

「こんな下らん人間でいいんですか」

「下らんと言うな、あんたは神の子だよ」

と。そうでしょ、人間はみな神の子でしょ。イエスは我々を天地創造の神さまの御意みこころにそった本来の姿に回復しようとしてくださった。それを行ったのがイエスというお方です。そのために我々の罪・咎とが・背そむき、エゴを全部、キリストが吸い取ってくださいました。そして、ご自分の聖なる生き方、神中心の生き方、それを全部私たちにくださった。交換輸血みたいなことをしてくださいっている。それが恵みですね。

マタイ伝5章43節から。福音の最高峰と言っているいいものがここに表れていると思います。

「<sup>43</sup>『なんじの隣となりを愛し、なんじの仇あだを憎むべし』と云えることあるを汝等きけり。<sup>44</sup>されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。」

正直言つて、これはできませんわ、私は。皆さんはできますかね。やったところで、



「くやしい、くやしい。なんであんなやつのために祈らんなん」という思いがこみあげてくるのが私であります。「死にいたるまで罪びと」というのはそういうことです。キリストは、しゃあしゃあとこういうことを仰る。

「**仇を愛し、責むる者のために祈れ**」

と。それをキリストは十字架にかかってくたさることでやってくれたでしょ。

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分で何をやっているかわからないのです。

わきまえのない子供たちなんです。どうぞ、彼らを赦してやってください」

と。キリストは言い放しではない。十字架に釘けられることは痛いと思います、キリストであっても。私だったら、

「こんちくしょう、この馬鹿者たちよ。わしをこんなふうにしてききって、ただで

はおかん。一緒に地獄へ墮ちろ！」

と思うのが私です。けれども、イエスは

「**彼らを赦してやってください。彼らはわきまえのない子供たちなんですから**」

と。なんと高い次元におられることか。「月とスッポン」というけれども、本当に高い次元にいらつしやる。

「**左の頬を打たれたら、右の頬を出してやれ**」

と。ぶつたやつの手がしびれるよと。そういうことです。全然、次元が違うんです。我々がそんなことをやったらいけません。でも、キリストは、言葉で言うだけではなく実行します。十字架の上で実証なさって、実践なさっているから、私はもう頭があがらない。

「**45**これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を**悪しき者**のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者に

も降らせ給うなり。**46**なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、

取税人も然するにあらずや。**47**兄弟にのみ挨拶するとも何の勝る**ことかある**、

異邦人も然するにあらずや。**48**然らば汝らの天の父の**全きが如く**、汝らも全

かれ」

天の父の全きを示しています。

「**悪しき者にも善き者にも目を昇らせ、雨を降らせ給う**」

一視同仁である。実にお天道さんはそんなふうには照らしている。それで桜も咲いている。あれが父の心だよと。

だから、キリストさまは決して狭いことはない。日本人が受けとっているキリストというのにはなにか狭い。狭つくるしい窮屈なキリストが伝えられているかも知れませんが、本当は**広大無辺**なんです。広大無辺で、どんな罪びとも悪者も、悔い改めれば赦してください。最後まで反抗していたらだめです。「悪かった」といって悔い改めれば、どんな悪人でもお赦しください。



そのことはルカ伝24章の十字架上の二人の盗賊の所に出できます。片一方の盗賊は、  
「お前は神の子ならばここから下りてみる」  
と。もう片方は、

「口を慎め。俺たちは悪いことをしてきた殺人犯だ。十字架にかけられるのが当たり前なんだ。でも、真中にいらっしやる方は違うんだ。口を慎め」  
と。そして何と言いましたか。

「どういうご縁かしりませんが、一番最期の時にあなたとご一緒できて本当にしあわせです。あなたが御国みくににお入りになる時は、こんな奴がいたということを覚えていってください」

と、それだけです。「天国へ連れて行ってくれ」なんて頼んでいない。

「こんな奴がいたということ覚えていってください」  
と。キリストは、

「汝、今日、我と共にパラダイスにあるべし」

と言われた。これが福音なんです。人間の枠を超えています。「あなたはこれから罪を償つぐなってこないと私は知らんよ」なんて言っておられない。

「汝、今日、我と共にパラダイスなり」

と。地上に生き残っていたら償つぐないはしますよ。地上に生き残っている間は、せいぜい償つぐないはしつかりやるべきだと思う。

「キリストが赦してくれたから、償つぐないはしらん」

なんて、そんな借金を踏み倒すようなことはいけません。できる限りの償つぐないをする必要はあると思います。それも祈りをもってやれば必ず成就してくださる。やっているうちに相手が「あなたのその気持ちだけでもう充分だ」と、きつとそうなると思うんです。キリストによって赦された者は無責任ではない。人としての道は外はずさない。しかし、それが重すぎてできないときは、

「主よ、助けてください。私は、重すぎて償つぐないできません」

「いや、大丈夫だよ。私が守っているから」

と。キリストに助けを求めたら、キリストは必ず守ってくれます。しかし、「キリストが全部やってくれるから、私は知らん」なんて、そんな借金をして踏み倒すようなことはいけません。そんなクリスチャンではないはずですよ。やはり、この地上では地上の法則に従って、償つぐなうときは償つぐなう。しかし、それを支えてくださり、慰めてくださるのはキリストさまです。我々は、キリストの御意に従っているいろいろなことを、この世でやるべきことをやれば、必ずそれはサポートしてくださる。足りない所を補ってくださる。「クリスチャンだから、そんなことは知らん」なんてことは通らない。私はそう思っています。



## ● 神に対する絶対的な信頼

次は、マタイ伝の6章19節です。私は若いときに心配性で、先々のことまできちんと保証されていなかったら生きていけないような、そんな人間だった。高校の三年間担任をしてくれた女性の先生が、最後の父兄面談があった時に、私の母親に言った。

「あなたの息子さんは石橋を叩いても渡らへん人や」

と。絶対的保証がないといかんといい、そのくらい慎重だということをお先生が言われた。私はそういう人間だった。先々の保証がないと安心できない。「ケセラセラ」「スペイン語で「なるようになるさ」の意味」なんて言っているやつには腹が立った。

「無責任きわまりない、もつと責任を自覚しろ」

なんて、そんなふうな思いでいたから、ものすごく苦しかった。自分で自分を苦しめた。

というのは、神さまを知らなければ、自分が責任をとるしかないでしょ。自分のことのみならず、自分を頼りにしている家族とか親とか、いろいろなものを私は背負いこんでいた。私の大学の恩師が、

「奥田君、なんで、君がそこまで背負いこまなければいかん？ あんたのお兄さん

もおるじゃないですか」

「はい、兄は知らん顔しています」

なんて。そのくらい、私は責任感が強かった。何もかも自分が背負わなければいかんと、背負えるはずもないのにやっていた。だから、本当に息苦しかった。夜、寝ている間だけがしあわせだった。朝、目が覚めると本当につらかった。そういう人間が、このマタイ伝によってどれだけ慰められたか。「ああ、ありがたい。これだ」と。

「責任は私がとる」

と、キリストが言ってくれました。

「汝ら、思い煩うな。まず神の国と神の義を求めよ。そうすれば、必要なも

のは全部添えて与えられる」

と。ものには順序があると。

「あなたが先立つのではない。神さまがあなたに必要なことを全部備えられるから、

あなたはまず神さまへ帰ってこい」

と。それなんです。そこがこの19節からの所です。

《「汝ら、宝を天に積み」神と富とみとに兼ね仕える事は出来ない。

「富」において「この世」を指しています。

何を食らい、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を着んと体のことを思い煩うな。》

「空の鳥を見てごらん。ちゃんと養ってもらっているでしょ。野の花を見てごらん。あの栄華を極めたソロモンだって、この花の一つにも及ばなかった。



今日在って明日炉に投げ入れられる野の草をも神はこのように素晴らしく装ってくださっている。まして汝らをや。あなた方は鳥よりも花よりもはるか素晴らしいものとして神さまに愛されている。放っておくはずがあるうか。

ああ、信仰なき者よ。何を食らい何を飲もうかと思ひ煩うな。神を知らない者はそれをやるだろう。君も彼も本当に神さまを知らない人はそうだろう。しかし、今は違う」

と。「異邦人」とは「神さまを知らない人」と読み替えればいい。神を知らない人は自分で神を作り出しかなかったから。けれども、あなたは神さまの子なんだ。神さまはあなたを愛していらつしやる。「あなたのことは責任をもつ」とハッキリ約束してくれている。そして、まず神さまの所に帰ってくるのが当たり前ではないかと。

《汝らの天の父は、凡てこれらすべの物の汝らに必要なを知り給うなり。まず神の国と神の義とを求めよ、

まずイエスを求めなさい、まずキリストを求めなさい。そうしたら、

さらば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。》

この御言葉はありがたかったですね。もう心配性しやうせうで心配性で、明日も明後日もその次の日も、来年も再来年も、そこまで全部、自分で責任を負おうとしていた。しかも、自分のみでなくて家族のこともみんな私が背負いこんでいた。それに対して、

「二日の苦勞は一日にて足れり」

「ありがとうございます、本当にもう肩の荷がおりました」

と、これですわ。そういうことを皆さん、味わわれなかったですか。味わった人間にとつてはもうありがたくてしょうがない。

《これらの言葉の背後に在るのは、神に対する絶対的な信頼である。》

### ● 荒野における試み、湖上で眠り給うイエス

イエスがこういう言葉を発せられたということは、イエスご自身の生き方がその言葉とおりだったからです。イエスご自身が神さまに対する絶対信頼の中に生きておられた。イエスの神さまに対する絶対信頼の姿がどこに表れているか、というのをここにいくつか挙げました。

《イエスの神信頼の姿は、荒野における試み(マタイ伝4章1〜11節、ルカ伝4章1〜13)、

湖上で眠り給うイエス(マタイ伝8章23〜27節、マルコ伝4章35節〜41節、ルカ伝8章22節〜

25節)、最終的には、ゲッセマネの祈り(マタイ伝26章36節〜46節、マルコ伝14章32節〜42節、

ルカ伝22章39節〜46節)において示されている。》

これらを皆さんと一緒に味わいましょう。まず、マタイ伝4章の「荒野における試み」。



イエスご自身がこういう試みを受けておられるから、我々の弱さとか痛みをご存知なんです。イエスがなんらそういうご経験がなかったら、いくら神の子でも、本当の意味では、我々の痛み苦しみ、悩みを知っていただけないかも知れない。けれども、イエスは本当に荒野の試みで、言うならば、鍛え上げられたと言っていると思う。4章の前に何が書かれていますか。3章16節、洗礼者ヨハネからバプテスマを受けられました。

「<sup>16</sup>イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、<sup>17</sup>鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。

このようなことは誰にも起こらなかった。初めてイエスにおいてこれが起こった。しかも、

「<sup>17</sup>また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』』  
という御声が聞こえてきた。洗礼者ヨハネから悔い改めのバプテスマを受けた人はたくさんいる。誰もそんなことは起こらない。けれどもただイエスにおいてだけこのことが起きた。

「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」

この御声のことがもう一度語られている所がある。山上でイエスが変貌された所です。ペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて山の上に登られて祈っておられた。イエスはまばゆい姿に変貌されて、既に召された古代イスラエルの指導者モーセと預言者エリヤが顕れてきた。イエスがどういう死に方をなさるか、そのことを相談していた。モーセとエリヤは帰って行った。その時、天から御声がきて、

「これは我が愛しむ子なり。汝らこれに聞け」

という言葉があった。そして、ペテロはペテロ書の中でその時のことを言っています。ペテロの第二手紙の1章14節から、

「<sup>14</sup>そは我らの主イエス・キリストの我に示し給えるごとく、我わが幕屋を脱ぎ去ることの速かなるを知ればなり。

「幕屋」というのは自分のからだのこと。即ち、肉体を去ること。つまり自分はもう肉体の命はここで終わる。殉教の死です。そのことはちゃんとわかっている。

「<sup>15</sup>我また汝等をして我が世を去らん後にも、常に此等のことを思い出させんと勉むべし。<sup>16</sup>我らは我らの主イエス・キリストの能力と来りたもう事とを汝らに告ぐるに、巧なる作話を用いざりき、我らは親しくその稜威を見し者なり。

この話がああ「山上の変貌」のことをさしていると思います。

「<sup>17</sup>いとも貴き栄光の中より声出でて『こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ』』  
と言いつつ、主は父なる神より尊貴と栄光とを受け給えり。<sup>18</sup>我らも彼と偕に聖なる山に在りしとき、天より出づる此の声をきけり。<sup>19</sup>かくて我らも有るる預言の言は堅うせられたり。汝等この言を暗き処にかがやく燈火として、夜明け、明星の汝らの心の中にいつるまで顧みるは善し。」

ペテロもあの「山上の変貌」の所に居合わせ、異常な体験をした。そのことがここに出て



いる。その山上で聞いた御声と、聖霊のバプテスマを受けられた時の御声が同じなんです。「こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ」

と。次は、「湖上で眠り給うイエス」です（マタイ伝8章23節〜27節、マルコ伝4章35節〜41節、ルカ伝8章22節〜25節）。マタイ伝8章23節、

「<sup>23</sup>かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。<sup>24</sup>視よ、海に大なる暴風おこりて、舟、波に蔽わるるばかりなるに、イエスは眠り給う。」

大嵐の中でイエスはスヤスヤと眠っておられる。神のふところの中に眠っておられるという事です。弟子たちは漁師ですよ、漁師は嵐に馴れているはずでしょ。弟子たちは御許に行き、起こして、「先生、先生、大変ですよ。我々はおぼれそうですよ」と。

<sup>25</sup>弟子たち御許にゆき、起こして言う『主よ、救いたまえ、我らは亡ぶ』<sup>26</sup>彼らに言い給う『なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ』

「信仰なき者よ」と言っているに等しい。

すなわち起きて、風と海とを禁め給えば、大なる嵐となりぬ。<sup>27</sup>人々あやしみて言う『こは如何なる人ぞ、風も海も従うとは』

まあこういう所は本当に痛快だと思いませんか。漁師たちは溺れることはないはずですよ。自分たちは漁師でさんざんいろんなことに出会っているはずですから。けれども、ここではおたおたしている。素人のイエスは舟板を枕にすやすや眠っている。このコントラスト、それはもう本当に驚きですね。

### ●ゲッセマネの祈り

次に、神信頼の姿が示されている三番目の「ゲッセマネの祈り」の所に入りましょう（マタイ伝26章36節〜46節、マルコ伝14章32節〜42節、ルカ伝22章39節〜46節）。これはもう大変な所です。ルカ伝22章を開いてみます。

イエスが弟子たちを二人ずつ一組みにして伝道につかわされる時はそれまで、「財布の中にお金なんかいらん、何も持たないで行け、働きの人が報酬を得るのは当たり前だ」と

と言って、弟子たちをつかわされていた。ところが、この場面では「武装をしろ」と言われた。ルカ伝22章35節、

「<sup>35</sup>かくて弟子たちに言い給う『財布・囊・鞋をも持たせずして汝らを遣ししとき、欠けたる所ありしや』彼ら言う『無かりき』」

それは神の守りがあったからだ。しかし今は違う。今は神さまの守りがなくなっている時。

<sup>36</sup>イエス言い給う『されど今は財布ある者は之を取れ、囊ある者も然すべし。また剣なき者は衣を売って剣を買え。<sup>37</sup>われ汝らに告ぐ「かれは徳人と共に数えられたり」と録されたるは、我が身に成し遂げらるべし。凡そ我に係わ



る事は成し遂げらるればなり』<sup>38</sup>弟子たち言う『主、見たまえ、茲に劍二振り』<sup>39</sup>イエス言いたもう『足れり』

遂に出でて、常のごとくオリブ山に往き給えば、弟子たちも従う。<sup>40</sup>其処に至りて彼らに言いたもう『誘惑に入らぬように祈れ』<sup>41</sup>かくて自らは石の投げらるる程かれらより隔り、<sup>42</sup>跪きて祈り言いたもう、『父よ、御旨ならば、此の酒杯を我より取り去りたまえ、されど我が意にあらずして御意の成らんことを願う』<sup>43</sup>時に天より御使あらわれて、イエスに力を添う。<sup>44</sup>イエス悲しみ迫り、いよいよ切に祈り給えば、汗は地上に落つる血の雫の如し。

イエスのゲッセマネという所での祈りの苦しさは、誰にもわからないと思います。推測するしかない。私が推測するに、今までイエスというお方は神さまといつも一つだった。離れたことはなかった。イエスが神さまと離れて存在するなんていうことはありえないことだった。いつも「父よ」と言っておられたら、もう

「父と我とは一つなり」

と。それから引き離された父無き、神無き世界。それは地獄。そこへ突き落とされようとしている。想像もつかない所へ今、行こうとしている。そういう事態にあつて、

「あなたと私はいつも一つであつたではありませんか。私はあなたの御意に背いたことは一度たりともありません。私にとつてあなたがすべてでした。あなたが私であり、私はあなたの中になりました。その一つであつた私が、なぜ、引き離されて、あなたのいない世界に、暗闇にどうして落ちなければいけないのですか。全知全能の神さまは、どうして、人々を救うのに私がそういうことをしなければならぬのですか。あなたならもつと他の道をご存知のはずでしょう」

と。こうしたイエスの思いは私の推測です。でも、

「お前は十字架を負うしかない」

と、その答えしか返つてこなかった。

<sup>45</sup>祈りを了え、<sup>46</sup>起ちて弟子たちの許にきたり、その憂によりて眠れるを見て

言いたもう、<sup>46</sup>『なんぞ眠るか、起て、誘惑に入らぬように祈れ』（ルカ23・35

〜46）

弟子たちは眠っていた。一番大事な時に、祈つていてほしいと言われた時に、三人の弟子はみな眠りこけていた。この姿が弟子なんですね。「終わりまで行きます、死にいたるまで従います」と、ペテロなんかは大啖呵を切つてました。「ほかの人なんかは当てにならない。私にかぎつてあなたを棄てるようなことは絶対にありません」と言つたけれども、そのペテロでさえ最後に裏切りました。鶏が鳴く前に三度否んだと書かれています。

「<sup>50</sup>その中の一人、大祭司の僕を撃ちて、右の耳を切り落とせり。<sup>51</sup>イエス答えて言いたもう『之にてゆるせ』而して僕の耳に手をつけて医し給う。……」



54 遂に人々イエスを捕えて、大祭司の家に曳きゆく。ペテロ遠く離れて従う。  
 55 人々、中庭のうちに火を焚きて、諸共に坐したれば、ペテロもその中に坐す。  
 56 或る婢女、ペテロの火の光を受けて坐し居るを見、これに目を注ぎて言う、『こ  
 の人も彼と偕にいたり』 57 ペテロ肯わずして言う、『おんなよ、我は彼を知らず』  
 58 暫くして他の者、ペテロを見て言う、『なんじも彼の党与なり』 ペテロ言う、『人  
 よ、然らず』 59 一時ばかりして又ほかの男、言い張りて言う、『まさしく此の人  
 も彼とともに在りき、是ガリラヤ人なり』 60 ペテロ言う、『人よ、我なんじの言  
 うことを知らず』 なお言い終えぬに、やがて鶏鳴きぬ。 61 主、振り反りてペ  
 テロに目をとめ給う。ここにペテロ、主の『今日にわとり鳴く前に、なんじ  
 二度われを否まん』と言ひ給ひし御言を憶いだし、62 外に出でて甚く泣けり』  
 （ルカ23・50〜62）

このペテロの姿が我々の日頃の姿なんです。あのペテロできえこうです。だから、人間が  
 イエスの弟子だといつて伴いて行くなんて、普通の人間にできることはありません。我々  
 人間には自己保存本能というものが骨の髄まで具わっている。危険がくれば逃げる。その  
 我々がキリストと一緒に十字架を負って生きることが己を死なせ、新しく生まれ変わらな  
 ければできないことです。聖霊の力が私たちをそのように変えてくださる。そのことをパ  
 ウロが言っています。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。われ今、肉  
 体において生くるはわがために己が身を献げたまいしこのイエスを信するに  
 よって生くるなり」

と、パウロはガラテヤ書2章20節で言いました。だから、肉なる我々人間はその肉の力で、  
 意志の強さで「キリストに従う」なんてことはできないんです。それを百も承知のうえで、

「その弱さも裏切りも背きも全部、十字架で片付けたよ。十字架で贖われないもの  
 は一つもない」

と。我々クリスチャンが「十字架、十字架」と言うのはそのためなんです。

「十字架の言は、滅ぶる者には愚かなれども、救いにあずかる我らには神の  
 力なり」

と、コリント前書1章18節にあります。

「神の愚かさは人よりも賢く……」

とありますね。そのとおりです。コリント前書の1章18節から2章にかけて霊の次元のこ  
 とが書かれています。

「キリストは我らの聖と義と贖いとになりたまえり」

と。これらのことは全部、有機的につながっていて、それを本当に私たちのうちに咀嚼して、  
 「アーメン、アーメン、全くそのとおりです！」



と。こういうイエスさまに出会ったら、自分を献げないではいられないではないですか。「己を惜しむ者は生命を失い、わがため福音のために己を棄ててかかる者は永遠の生命を得ん」

と、キリストはハッキリ言われる。そういうふうには我々自身を造り変えて、「本当に主さま、あなたに従わざるをえません。あなたを抜きにした人生は、私にはもう全然魅力がありません。あなたと一緒に生きてこそ、本当に私は生きました。生かしていただいた。うれしい。ハレルヤ！ 讚美！ 神讚美に貫かれます」と、私はそういうふうに変わってきました。昔からそうじゃありませんよ。でも、変わってきました、歳とともに。

### ●我々の生き方の指針

ここまでイエス・キリストの伝道の特徴について語ってきましたが、それを受けて最後に、

#### 《Ⅱ 我々の生き方の指針》

について述べてみたいと思います。

イエスの十字架上の死、復活、昇天、聖霊としての降臨・内住の事態は、我々をして、神の子としての「新生」を体験した者として、

皆さんも是非ともこうした体験をしてくださいね。

神・キリストの御心を第一として生きる生き方、言い換えれば、わが身において、その生き方において、「神・キリストの栄光の顯れんことを」との祈りに生きる者となった（そのように変えられた）。

パウロがガラテヤ書2章20節で告白しているように、「我、主と偕に十字架せられたり。もはや、我生くるに非ず、キリスト（御霊のキリスト）我が内に在りて生き給うなり」の心で生きる。日々、聖書、とくにキリストの言葉を食物として生きる。

「汝ら世に在りては患難あり、されど、雄々しかれ、我すでに世に勝てり」  
これはヨハネ伝のキリストのお別れの言葉の最後に出てくる言葉ですね。

との主イエス・キリストの励ましと御力を頂いて、「信・愛・望」（コリント前書13章）に生きる。たとえば、肉体は滅びても、滅びる事の無い「永遠の生命」「霊のいのち」を賜わっているから、どんな事態や逆境に遭つても屈しない（コリント後書4章7節～18節）。

我々の霊的食物は、キリストの御言葉である。まことに、「人が生きるのは、パンのみによるに非ず、神・キリストの御口から出る一つひとつの御言葉による」。

聖書は、「この世は悪しき世である」と宣告している。決して、この世は善き世であるとは言っていない。「悪しき世」というのは自己中心、神を冒瀆するような精神、それがはびこっている。自己中心、神を冒瀆するような精神が跋扈している。だ



から、「誰でも私（イエス）に従って来たいと思う者は、己を棄て、日々己が十字架を負って、私（イエス）に従って来るように！」と諭された。

「聖書を生きる、キリストを生きる」。これこそが、人としてのまことの道であり、まことの生き方である。「我は道なり、真理なり、命なり」と宣言しておられる主イエス・キリストに従って、キリストを生きる生き方こそが、永遠の生命を賜わった者として、ふさわしい生き方である。》

こういうふうには言わざるをえません。

平成最後の講演会は、素晴らしい講演会になったと思います。どうもありがとうございます。これで終わります。

## ● 祈り

それでは、短く祈ります。

主イエス・キリストさま、万物が長い冬を耐え抜いて、生命に目覚め、桜はうるわしく咲きほこっていますこの春のよいとき、今日、あなたの御言に触れ、御霊に触れ、あなたの生命をいただくこの一時を与えられたことを感謝いたします。

「イエス・キリストは昨日も今日も明日も永遠に変わり給うことなし」と、ヘブル書にありますように、また、

「我はなお進み行くなり」

と仰ったように、盛んなるイエス・キリストさま、あなたが一人びとりの中に御霊のキリストとして宿ってください、

「視よ、我は生ける者。もはや死というものはありません」

と。あなたの生命がお一人おひとりを活かし、永遠の生命を約束し、そして、たとえ肉体が滅びるとも、この霊はあなたから霊体をいただいて、天に向かって羽ばたいて昇っています。そのような盛んなる生命をくださいました。

日々、あなたを讚美し、あなたに感謝し、あなたを語り伝えていきざるを得ません。どうぞ、ここに集まられたお一人おひとりが、

「わがうちにキリストが燃えてくださった」

と。あのエマオ途上の旅人が、

「道々、語り給うた時、わが心うちに燃えしならずや」

と仰いましたように、どうぞ、今日のこの講演会を通して、本当にお出でになった方々の心に火が灯り、この火が永遠に燃え続けてくださるよう、希いたてまつります。

この感謝と讚美と祈りを、皆さまの祈りとあわせ、主キリストの尊き御名をとおして御前にお捧げいたします。アーメン。

